

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 日本・東アジア文化学領域
申 福貞

【論文題目】

1930・40年代日本語文学と「境界」の表象 - 東アジアを視座として -

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、近代日本の東アジアをめぐる言説、特に1930・40年代の東亜共同体論や共栄圏論の基底に、帝国としての日本の「内／外」や「自／他」などの「境界」を定義し形成する思考が存在したという問題意識から出発して、それらの言説と不可分に展開した同時期の日本語文学を「境界」の表象という視点から検討した論考である。それら1930・40年代の日本語文学の中から、特に同時期の東アジア各地域とその活動を通じて多様な接点を持った「日本浪漫派」と称される作家群を主要な分析の対象としている。

本論文全体は、序章、五章からなる本論、そして終章を含めた全七章から構成されている。序章では、1930・40年代の日本における「境界」とその形成に関わる言説のあり方を西田幾多郎などの同時代の思想に言及しながら検証する。そして、この「境界」という分析上の視点を導入して同時期の「日本浪漫派」の作家群をその作品に現れた「故郷／異郷」「中心／周縁」「内地／外地」「文明／野蛮」といった二項対立的な表象に注目して考察するという方法を提示する。本論では、第一章で作家檀一雄による満州での放浪と移住経験を反映した一連の小説群を対象として、満州経験を経た檀が描く「故郷」の表象が同時代の「伝統」的な「故郷」像を相対化する性格を持ったと論じる。第二章では、青年期に台湾での生活経験を持った作家中村地平による「南方」を素材とする小説群を検討し、それらの中村の小説群が当時の「内地／外地」をめぐる近代的進歩主義や拡張主義の言説に対して批評的立場を示すと評価する。また続く第三章では、中村の主張した「南方」的文学の理念を検討し、特に中村がその出身地である宮崎を論じた『新風土記叢書』中の「日向」を解釈して、それが同時代日本の「境界」をめぐる縮図を提示したとする。さらに第四章と第五章では、檀や中村同様に「日本浪漫派」に関わった作家太宰治による戦時下の作品群が「境界」の視点から考察される。第四章では、『新風土記叢書』収録の太宰による紀行小説「津軽」について、この小説が作家チェーホフの旅行記「シベリアの旅」からの影響を持つ可能性が高いことを指摘した上で、「故郷」への旅という物語構造を通して「中心／周縁」「文明／野蛮」の支配的構図を暴き出す志向を持ったと論じる。第五章では日本留学中の鲁迅（周樹人）をモデルとした小説「惜別」を対象として、この小説に鲁迅の実弟であった周作人の作品集『瓜豆集』からの強い影響があることを示した上で、当時の日本と中国を含むアジアとの関係性を批評的に体現する作品としてこの小説を評価する。そして終章では、「境界」という視点から1930・40年代の日本語文学を検討する試みの展望と課題を考察する。

本論文の示す新知見と独創性は、以下の三点に要約される。第一に、1930・40年代における「境界」の表象という分析上の視点の設定を通して、文学を含む幅広い同時代言説の新たな横断的分析を試みたことである。この視点は概念の精緻化が必要と思われる余地を残すが、その今後の発展の可能性は大きい。第二に、先行研究が手薄であった戦時下の檀一雄や中村地平等の作家の活動と作品の評価を、この時期の文学史に明確に位置づけたことである。同時代の東アジア地域との関係性から展開

したその作家評価は、示唆に富み、今後の研究に対して有益である。第三に、各章での個別テキストに関する分析は独創的な観点を多く含み、従来指摘がない多くの観点を示す。太宰治の作品の典拠指摘など、新発見といってよい。

以上の通り、本論文は、1930・40年代を中心として日本近代文学の研究において新たな知見と展望をもたらすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

学位論文申請者は、平成24年1月16日（月）に実施した口頭試問において、博士学位論文の内容に対する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また平成24年1月21日（土）に開催された学位論文発表会において、博士学位論文の主旨についての的確な発表を行い、これに対する質疑に対しても適切に応答した。

これらにより、当該研究テーマについての博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士（文学）の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査 坂元 昌樹

委員 森 正人

委員 吉川 榮一

委員 西槇 偉

委員 福澤 清

委員 山崎 正純